

■いわて文化ノート

花巻の大日堂二尊像

主任専門学芸員 佐々木勝宏

本年度、新たに県指定文化財となった花巻市湯本大日堂の大日如来像2体の調査について報告します。

県教育委員会の依頼で、県文化財保護審議会委員で盛岡大学教授大矢邦宣氏を中心に、岩手大学教授田中恵氏の助言を得て、花巻市博物館と当館の学芸と、盛岡大学の学生が補助員として調査に参加しました。

大日堂大日仏2体は、すでに花巻市の指定文化財となっていました。

右側：伝白山大権現「嘉慶三年銘像」155cm

中央：伝大日如来 「慶長九年銘像」152cm

写真1を見てください。これを堂内安置位置から中央像と呼びます。胸が厚く、逞しい腕で肘を張り、台座（上蓮華座・下岩座）までの半丈六（約2.4m）像で、全体に胡粉が良く残り、白色の目立つ人肌の大日様です。肩にかけた布の条帛は地が緑で裏地が朱です。膝に懸かる裳は朱地に緑の蓮華唐草文がかすかに見えます。腕飾りの臂釧は金色が残り、上紐をつけ蓮華を置いています。天冠台（かんむり）と額の白毫は金色に輝き、眉と瞳や前髪は黒々として、側髪が耳に二筋に渡り、唇の橙色が鮮やかです。法界定印を結んで結跏趺坐し、威厳に満ちて秀逸です。

中央像の膝裏墨書には、藩祖南部信直から稗貫周辺支配を任された重臣北尾州（北尾張守）信愛・松齋が大檀那として経済的な援助をし、別当、仏師、願主名と白山の文字に胎藏界大日の種字がありました。慶長9年（1604）の修理時のものです。胎内胸部の造立時墨書もあったのですが、膝裏を見て、花巻市の指定の際は、この中央像を「慶長九年銘像」としたようです。慶長期には大日仏は白山神として信仰されていたのでしょう。

白山神は、石川・福井・岐阜三県境の山頂に、奈良時代の僧泰澄によって祀られたと伝えられます。菊理姫神や白山妙理大権現とも呼ばれ、神仏習合で、本地仏は十一面観音菩薩として信仰されています。

右側像は頭部が抜け、腹と背の内側の墨書が判読できます。元禄13年（1700）に、この像を造立するにあたって、創建した嘉慶

の時のことを胸に、修理した慶長の時のことを背に書き写していました。こちらが古いという伝承もあり、胸の墨書から、「嘉慶三年銘像」としてしまったのでしょうか。膝裏には施主が湯本・台・金屋（金矢）・小瀬川の4か村で、別当、仏師も記されていますが、修理時のものと勘違いしたようです。

今回の調査で次のようわかりました。

「慶長九年銘像」・中央像→〔嘉慶仏〕

「嘉慶三年銘像」・右側像→〔元禄仏〕

このことは、江戸時代の宝暦（18世紀半ば）年間まで別当であった高橋家の文書や仏像の修理状態、胎内と膝裏の墨書、堂内に保管されてきた9枚の棟札・由来板・祈願札などによっても確認できました。表1の1、2、4は〔嘉慶仏〕で、3は〔元禄仏〕のことです。

	1	2	3	4
年号	嘉慶3	慶長9	元禄13	享保7
西暦	1389	1604	1700	1722
大檀那	大畑時義	北 信愛	(南部行信)	(南部利幹)
別当	民部	吉祥院	高橋源蔵	高橋源蔵
開眼	良清	—	—	—
仏師	良秀	高海行人	高橋吉右衛門	押桐文弥
願主	(大畑時義)	俊慶と蔵助	源蔵と4村	源蔵と近江

〔表1〕

中央像〔嘉慶仏〕は、今から620年ほど前の嘉慶3年（1389）〈北朝の後小松天皇の年号／足利義満全盛のころ／2月9日に康応に改元〉に造立され、400年ほど前に、造立から220年を経て、慶長9年（1609）〈徳川家康が関ヶ原の戦いに勝利し、江戸幕府の基礎を固めていたころ〉に修理され、その後破損がひどく、修理は難しく、身代わり、前立ちとして今から300年ほど前の元禄13年（1700）〈赤穂浪士吉良邸討ち入りの2年前〉に〔嘉慶仏〕の写しとして、大きさや形状を模倣して、右側像〔元禄仏〕が造立されました。由来板では〔嘉慶仏〕を古仏、〔元禄仏〕を新仏と呼び分けています。

その22年後に、〔嘉慶仏〕が修理されています。元禄時点では修理技術の未熟さか、あるいは費用不足で断念していたのでしょうか。享保7年（1722）に修理再興されま



写真1：〔嘉慶仏〕（中央像）

す。出来映えもよく、やはりオリジナルを御堂に迎え入れたいと考え、〔元禄仏〕は金矢村の宇南権現に移し、その2日後に〔嘉慶仏〕を大日堂に迎えています。それが大日如来の縁日の28日なのです。この享保期に〔嘉慶仏〕は大日如来として信仰されていたようです。その後の様子も、いくつかの資料に散見します。

松井可敬の『温泉一見記』に享保16年（1731）時のこととして、「大日堂は湯本村の追分の少し手前の右手山際（山際）の松や杉が茂っている所にある。しらやまと呼ばれているのは、小白山権現もあるからだ。大日の尊像は台座から7、8尺（約2.4m）ほどの大きさで、古仏で数百年経過し、蝕まれていたので、享保年中に再興された。嶋村与市が御首ばかりを修造した。毎年9月28日が縁日で村里の者などの参詣で賑わう。別当は葉山（羽山）の源次郎。再興の時、御仏の御胸のなかから筆記を取り出す。これは本の仏像（〔嘉慶仏〕）造立の時の記録なようだ。享保16年（1389）までで、343年前のこととなる。」と記し、それで享和元年（1801）年以前編纂の大巻秀詮編の『邦内郷村志』には、「旧館の西麓大日堂白山小社あり。大日堂の本尊が破壊（破損か）により修造された時、胸のなかに筆記があって日本尊の造立の時の記録で、開眼が良清で、別当は民部。大旦那が大畑禪門藤原朝臣時義で、嘉慶3年3月24日に開眼された。嘉慶3年は康応元年で、享保10年（1725）まで



写真2：〔元禄仏〕（右側像）

で337年が経過している。」とあります。

宝暦13年(1763)以前完成の南部御領内の社についてまとめた『御領分社堂』には、「湯本村に三間四面で萱葺の大日堂があって、別当は吉左衛門で、嘉慶三年の建立だと覚書にある。」と記されています。天保13年(1842)の『八幡寺林通検地図』には、杉木立に囲まれて大日堂と描かれています。

由来板には、押桐文弥の修復とあり、嶋村与市は記録されていません。文弥は嶋村在住なので、嶋村与市と同一人物の可能性もなくはないでしょうが、名前が文弥と与市です。その可能性はかなり低いと思われます。まず与市が頭部のみの修復を試みます。顔面は比較的残っていたものの頭頂部は破損がひどく髻の結び方や地の髪彫り形はすでにわからなくなっていました。それで前頭部が非常に大きくなり、髻の結び方が形骸化したのではないかと。天冠台より上は、損傷がひどく、下は残っていた。だから、髪彫り方や彩色に差違があるのではないかと。頭部修復状況を見て、像全体の修復も可能だと考え、仏師押桐文弥に依頼し、体軀の修理に及んだのでしょう。合力近江とあるのは近江商人の財力や近江ゆかりの修復技術者を招聘したのかも知れません。現時点ではそのようなことが考えられます。

明治維新後、神仏分離令の厳守を求められ、明治3年(1870)に御堂を安舎志豆宮として新造し、明治11年(1878)には大日

霊貴神(〔嘉慶仏〕)と白山姫神(〔元禄仏〕)に守護を祈願しています。別当筑後家が信仰を守るために苦慮していたことがわかります。明治17年(1884)大日覚王如来末社白山妙理大権現堂を再興しています。明治32年かと思われる政蔵と定吉の祈願札から明治維新以降の経過がわかります。神仏混淆は厳禁。還俗僧の神職は認めない。仏具は一切取り除くこと。江刺県大属の検分で大日堂は廃止と決定。大日様〔嘉慶仏〕を近くの松山寺に預け、白山神(小像)は山形県出身の真言行者の龍海の手に渡り、野中沢田の新築堂宇に祀られます。その後、野中の八重樫万次郎宅に伝わり、白山神の返却を要求するもかなわず、京都の仏師に依頼して新たに1尺6寸(約24cm)の白山神を造立し、大日堂に安置した。筑後家の子孫ならば傳之助・定吉父子の辛苦を忘れず、供養怠りなく勤めよ。と記しています。明治37年(1904)には筑後太治郎が發起人となって日露戦争の出征軍人武運長久と軍軍勝利を祈願しています。筑後家の系譜ですが、宝暦助左工門一天保助左工門一明治助左工門一傳之助一定吉一太治郎一伊一現当主章三氏となります。定吉が若くしてなくなったため、定吉弟政蔵が父と兄の辛苦を子孫に伝えようとしたことがわかります。9枚の棟札、由来札、祈願札は次の表2の通りとなります。

No.	棟札など	願主
1	元禄7年 御堂再興	源 内
2	享保7年 新仏造立 ・古仏修理由来	源 内
3	享和2年 御堂再興	助左工衛門
4	明治3年 新宮再興	助左工衛門
5	明治11年 大日白山 守護祈願	定 吉
6	明治17年 御堂再興	傳 之 助
7	明治32年 御堂再興	政 蔵
8	明治32年 白山神像 再興	定 吉
9	明治37年 日露戦争 武運長久戦勝祈願	太 治 郎

〔表2〕

最後に、尊像の変遷についてまとめてみます。大日堂の裏手にあたる白山長根の白山堂が破損し、〔白山神①〕は、大日堂に移

されました。脇堂あるいは、大日堂内に安置され明治32年までは伝存していました。

大日堂は、北東近郊に地名が残る地元有力豪族大畑氏によって南北朝時代に創建され、その本尊が〔嘉慶仏〕で、慶長期に北松齋によって修理を受け、元禄期には修理かなわず、身代わりの〔元禄仏〕が造立されます。幸い享保期に修理がなり、〔嘉慶仏〕は甦ります。〔元禄仏〕は金矢の宇南権現に移るも、明治初年の神仏分離令で、廃止に追い込まれ、やむなく大日堂から〔嘉慶仏〕は松山寺に、宇南権現から〔元禄仏〕も松山寺に移され、〔白山神①〕は野中沢田の小堂に移されます。明治11年には政府の統制が緩み、2体そろって大日堂に戻ってきます。御堂はその後も何度か修復されます。別当筑後家の屋号は白山堂(しらやまどう)です。せっかく、〔嘉慶仏〕と〔元禄仏〕が戻っても、白山神がありません。〔白山神①〕は結局返却されなかったもので、京都の仏師小泉卯助に依頼して新しく造立します。これを〔白山神②〕とします。大日堂には、現在617年前の〔嘉慶仏〕と、306年前の〔元禄仏〕と、108年前の〔白山神②〕と3尊像が安置されています。〔白山神①〕はその後不明のままです。江戸時代の別当高橋家、現在の別当筑後家のご尽力と地域住民の厚い信仰によって現在まで、貴重な文化財が伝存したことに感動した調査でした。



写真3：〔白山神②像〕